31. 中止

32. 頭部外傷特に頭蓋腔内血腫に就て

新治協同病院　小林二郎

私が昭和20年より今日まで外傷死に就て剖検した事例中頭部外傷は61例である。その前半10年間に就ては既に報告したが後半8年間36例に就ての知見を報告します。

その分類は硬脳膜外血腫12，硬脳膜下血腫11，広範囲蜘蛛膜出血3，脳損傷7，脳実質内血腫2，血管損傷1，となつている。その中硬脳膜外，下血腫に就て検討するに，(1) 骨折を有するもの20例にして骨折のないものにも血腫が認められる。(2) 血腫が他の蜘蛛膜，脳皮質実質出血を併有するのが殆んど全例である。(3) 外傷と血腫との部位知関係では硬膜上血腫は同部位が多く硬膜下は反対側にも多数発生する，之は外科的に注意すべきである。(4) 時間的関係では，血腫は数時間にして漸次硬い血腫が形成され，1月，2月と経過すると融解され液状となり薄い繊維性の膜でつつまれ体積が増大して脳圧迫が強まり死に至る症例なり。

33. 脊髄腫瘍の一治験例

長野県須坂病院　森川不二男，°熊谷信夫
松木博雄

両下肢の運動，知覚障害を主訴として，発症以来，約2年後に来院した，51才の女子の脊髄腫瘍を，胸椎椎弓切除により，完全に摘出した。腫瘍は第8, 9, 10胸椎の部に発生した，定型的な硬膜内髄外の神経鞘腫ある。

漸次増強する神経痛様疼痛，知覚，運動麻痺に対しては，脊髄腫瘍を疑い，診断が確定し次第，積局的に摘出術を行えば，約2年間も失われていた機能も，漸次回復するものであることを強調したい。

34. 類腱腫の2例

岩瀬国保病院　°三宅和夫，宇佐美勉，
荒川四郎

右下腹部腹壁に比較的巨大な腫瘤を生じ，自覚症状は全くなく，外科的に剔出し，全治せしめたが，組織学的検査により，類腱腫という診断の2症例を報告した。外国においては比較的多数の報告例があるが，本邦においては十数例の報告があるにすぎず，良性腫瘍ではあるが，局所再発が比較的多く，女性ではその21%に再発があるといわれており，我々の症例においても今後の経過を充分注意する必要がある。

35. 症例報告2例

深谷日赤病院外科　篠原治人，°長谷川雅朗

1)　特発性総胆管拡張症の1例

本症は比較的稀な疾患であるが，最近我々はその1例を経験したので報告する。

術前に経皮的胆道造影其の他の諸検査により確診を得，開腹して小児頭大に拡張せる総胆管と十二指腸に側々吻合をおいた。術後高熱が続いているが，その原因として吻合部を通して十二指腸内容の逆流が考えられる。現在，再手術其の他の対策を考慮中である。

2)　再発性胃癌穿孔による空腸横行結腸瘻の1例

胃癌のため胃切除術（B II 法）施行後約1年で再発し吻合部空腸輸出脚と横行結腸間に内瘻と形成した例を経験したので報告する。

根治的手術不能のため横行結腸肛門側空置，横行結腸口側・下行結腸肛門側吻合，下行結腸口側・空腸吻合術を施行，自覚，他覚的に症状は著るしく改善，術後3カ月現在生存中である。

36. 直腸癌と Grawitz 腫瘍との重複癌の1例

東京逓信病院外科　桑原　稔

最近経験した直腸癌と Grawitz 腫瘍との重複癌の一症例について，臨床経過，剖検所見についてのべ，文献的考察を若干加えた。

71才の男子，直腸癌手術にさいし，その腹腔内転移巣と考えていたものが左 Grawitz 腫瘍であることが判明，直腸切断・人工肛門設置・左腎剔出を行つたが，Grawitz 腫瘍の再発によつて死亡した。術後 E. K. G. で心筋障害・伝達障害を認めたが心庇護療法により正常化し，低K血症も発現したがK補給により治つたが，局所の左腎剔後の Grawitz 腫瘍再発のためと考えられる横隔膜圧迫による頑固な吃逆は死亡時までとれなかつた。

Warren & Gate の重複癌として三条件をみたすものとして重複癌と考えられるし，直腸癌と Grawitz 腫瘍の併存もそう多くはないので報告した。

37. 2, 3の胃症例について

多古中央病院　°西沢英三郎，木暮順一

X線診断上等に於て興味ある2, 3の胃手術症例について述べる。